

一同鹿丸五分 但右同新(註)あり釘五十代
 一同五分 但右同新(註)あり釘五十本
 一同拾七(註)分 但右同新大工五人但賃口持共
 七拾式分
 古ハ此度夫々書面之通仕度奉願候、尤成難之上村割
 方御免被為、仰付被下候様奉願候 依此段御断申上
 候 以上
 (註) 亥十一月廿一日 後 人 中 印
 進 上

(註) あり釘 船あり板に打ち止む釘
 (一) あり釘 普通あり釘
 (二) あり釘 嘉永七年(一八五〇年)

むすび

筆者は本文を草しながら思つた。嘉永六年六月三日には、ペリー提督の率いる米艦四隻が始めて浦賀湾に入港し、校閲して幕府に修好を求めた。同年七月十七日にはロシヤ軍艦四隻が長崎に入港して修好を求め、安政元年閏七月には、英國東印度艦隊司令長官スタリングが、長崎に入港するなど、外国關係が忙しくなりへた。従つて国内の様態論と開國論と益々烈しく相反撥し國を挙げて騷然とし、内憂外患共に迫るの危機であつた。

今回の古文書は下段その頃のものである。郷土の人々も貧しい生活の中からその頃の世情をどう感じていたか、また知っていたか、それとも国内の大勢を全く知らず、只その日その日の糧を求めたために、黙々と汗を流して働きつづけていたものであるまいか。

一方わが佐田藩は、これからの国内事情を領民に知らせていたであらうか。例の知らしむ可からず、依らしむべ

方式で、庶民はつんば撥敷におかされていゝのではあゝまいか。太平洋戦争末期に於ける日本國民大衆のようには、これも興味ある問題である。(終)

覚書

番匠川今昔物語 二

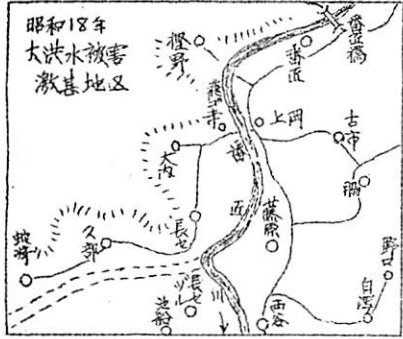
洪水との戦い

會員 池田 川 作

昭和十八年十月十九日は終日こゆもななく雨が降り続き、川の水量がふえ濁流が瀬枕を打つて流れ、今まで経験したことのない大洪水となつたが、まさか崩石を越す心算はあつたまいと安心してはいたが、その夜から雨は一層強くなり、川野繁葉蔵さんは家財道具の片附に懸命。川岸の片山さんの家にはものすごい勢で混り濁流が流れこみ、繁葉蔵さん経営の客馬車の駐車場には水が浸入をせしめ、西谷の警防団の非常召集により上りのうき葉くもろ、各戸から防火水槽(昔戦時中消火に備えていたコンクリート製水槽)を並べて流れ来る水をせきとめるのに必死。刻々水量は増し、消防団長河野市市さんの指揮督励も水勢に及ばず、並べた水槽が広小路までも流された。川野繁葉蔵さん宅では城山の小山高い安全な場所には避難した。番匠川一帯を見渡せば長瀬津留(今入城南運)も池船も水の中、堤防のない天神津留は上りの土居、内藤原から流れこんだ濁流が濁春いて荒れ、はるかた久部も中山も山の麓に点在する家だけが見える。

濁流は滔々、湧きつ流みへ押流れて来る人家から助けを求めざる悲痛を堪へ、激流の中から助けを求めざる人、人、消防団といえども救出する術もなく、恐怖に足もふらふら、ひたすら神仏に祈るのみ。市中も各所から増水し、航空隊のボートが救援のため巡回して晝食を配るなど、騒動であつた。

台風一過、上流の村から大勢の人達が死体捜索や、流れた家の詮索に来て、洪水の激しかつた話一が伝へられた。長瀬洋留の山本由太郎とその妻ミヨ子二人は、家も不共押し流され池船に跳泊していた畑の道運丸が板げたロープがつかまり、由太郎さんだけが助かり、ミヨさんは屍体となつて有明に流れた。長瀬の松崎夕々さんは家と共に流れ家より下に沈み、屍体となつて見つかつた。池船の金融業者瀨さんの母と、二人の男の子が濁流にさらわれた。下駄のはまが之の成山さんの家では、大人三人と子供四人が濁流にのまれた。久部は農業倉庫を持つ組合長池田三平さんは、玄米七百俵と倉庫の中は積んでいた、その下積の三百俵が水につかり、組合員と共にその乾燥に苦労し、濡れ米の処分につたという。



番匠(佐藤生野、今は堤防にたつて)當時あつた部族(はま)は全滅で、殆んどの家が流れたと次から次へと噂はとんだ。私は五年間上野青年学校に勤務していたので知人も多く、すぐ見舞に行き当時の状況を聞いた。不意の出水で家財道具も流されたとのこと、渡辺淳一さんは全家族五人圧死、奥千代さんは家と共に押し流され、白

木の渦の中はまき込まれた。屍体は部族の人が発見した。(番匠川原に窪地、昔澤人を存置した場所、今南無妙法蓮華経の塔がある)石井又四郎さんは子供と二人家と共に押し流され、助けを求め声を限りさげんだとこの神仏の加護か、白木の渦にもまき込まれず、奇跡的に白木に流れつき命拾ひして、現在佐伯市内で幸いに商売に励んでいる由である。可哀なりな人は水銀工場に勤務していた大久達で、異境の地に新天地を求めたいと出稼者が数名いたが、飯場と共に押し流された。その中の一家族は番匠の鉄橋に流れかきり、互いに励まし合つて辛うじて這い上つた夫の手が、妻の手に届いた刹那力がつきて水口よりおれ、出産直前あつたその水死体が発見され、その悲惨な姿を見た同僚はむせび泣いたという。又水銀工場で働いていた根岸の男の人は、流れた船(船)で死体となり発見された。佐伯の市街部も大勢水につかされた。殊に濁流の中に孤立した池船五の被害は甚だしかった。内田豊屋では二階に通ずる階段七段が四段まで水につかり、田中理髪店でも階段七段までつかかり、蔵場の鏡が全部水びたりになつたという。塩屋五の水計指圧では床上一米まで水につかり、土壁がまき込まれた。このようにこの昭和十八年の洪水は、どの家にも忘れ難い出来事だ、ない記録が残つていゝのである。

番匠川の河川改修工事が開始されたのは、実はこの大水害に先立つ昭和十二年の春であつた。先ず最初に川底の砂利を浚渫船を用いて取り去る工事が宮住組によつて始められ、その船の操縦には池田孝男さんが当つた。ちやうど建設中の海軍航空隊の岸壁や、兵舎の建設工事にこの砂利を多量に使用した。この仕事に従事したのは藤と蛇崎の船の所有者であつた。

た。私の友達前田藤作君を思い起す。体格がよくて力が強く、徴兵検査の時身長一米八十程、体重七十五キロ。第一乙で合格。大分県青年相撲大会に出場して優勝した。ことある。三島山と名乗り、兄弟とも同じ。ごちが相撲をとつていた。働き者で丹賀の要塞工事に砂必バラスと運搬。縁あって丹賀部落の山本家に婿養子に迎えられる。山本姓を多乗り、夫婦共々く暮ら。戦時中自衛隊の消化を割り当てられる。何時でも高嶺を引受けていた。子供が三人あり、長男は官住組(福徳相互)に勤務し、次男は小宮校の先生になり、長女は鶴城高校を卒業した。この藤作君釣りの名人で、こゝ番五川で釣を楽しんで余生を送っていた。蛇脣ははその指導をうけて鯛釣りの名人が数人ある。

次に川幅を広げるために、蛇脣の新地の家屋移転の工事が始まつた。肥田庄作さん、川野武巳さん、前田正規さんと次々に移転することになった。秋の収穫も終り、耕地の買収がはじまつた。剣崎が反当六。田、揚網が五。田、白水が四。耕地は女島津留にあるが所有者は蛇脣の人である。戦時中で兵隊も召集、徴用も受けていた当時として、不承不言も当時部落民の挨拶は「なんば取られなか」と値段でなく広さを問題にした。耕地を広く取られた人は、池田初治郎(以下敬称を略)池田隣、池田利明、池田三平、池田犬吉、池田豊作、肥田英治、広瀬政太郎、前田新作らで、私も四反とられた。私は土地代から八。田で軍刀を買った。長男利明が海軍予備学生を志願して、日本刀を殺しかるまで送つてくれた。残りの八。田で長瀬津留の桑畑を買った。(その土地は後に城南中学の敷地に買収された。)

昭和十二年度案による河川改修工事は、天度地変による春風秋雨を經て順調に進んでいたが、そこにはじめに

へた大水に見舞われたのである。即ち昭和十八年九月二十日、前日東の集中豪雨で近代まれな洪水となり、佐伯市民は番正川の愛憎をつかし、河川改修が早急に進められる必要が痛感されてきた。此頃において矢野市長は有力者の意見を聞き、成案をまつて市議会に諮った。会議はしばしば開かれた。池船区では過去に洪水で池船橋は流失して交通は杜絶し、遊蕩する場所もなく、特にこの度の十八年の洪水では十人の死者を出した若き経験を持つてゐる。市会議員の選出には、愛郷の念旺盛な玉師問世田健之助先生と、満場一致で出馬を願うことになった。

昭和十二年度案と昭和十八年度案の実施は、佐伯市民の関心をかきたて、航空隊跡に興国人館を誘致するのと時を同じうして、久部と大入島、霞浦、西上浦の漁業者が反対し、赤旗まで押し立ててこられた。市役所に矢野市長、森矢(毒吉)議長を詰問するなど。市会ではしばしば開かれ、議員は思いの意見をつげた。岸河内出身の高橋議員が「私は番正川には関係はない」とうっかり失言した。問世田議員は開口一番「議会は佐伯市の意見態度を決定する場である。議員として甚だ不謹慎である」とたいやめられたことを記憶している。

漫画家富永一朗先生も池船区の出身である。先生の絵には禪一つの絵が多いが、一朗先生も水のことと終生忘れられることかできないであらう。矢野市長の政治姿勢は「知るしむべし、依らむべし」とし、これが矢野市長の理念である。久部の反対も、市議会の中へ反対を話せばわかる。至誠は神に通ず、諺も通り、昭和十八年三月二十八日池船の湖治座(今の身会館)に於て起工式が行われた。来賓の祝辞に立つた久部の渡辺章男さんが、

「祖先伝来の美田が山底となるを思えば、悲憤落胆の土地所有者もあるが、佐伯市を水害から守るという大衆的見地から双手をあげて賛成する主人であります。願わくば此の工事が順調に進み、安居樂業の日を期待します。」

と、声淚とまじり下る祝辭には、急驟の如き拍手がわいた。護岸工事が完成したとき、区長成迫篤吉氏は区民を代表して、間世田先生の労を感謝して時計を贈った。

番匠川河川改修工事十八年度買収予定の地主の中には、前田新彦さん、池田文吉さん、池田三平さん、池田利明さんなどがおり、二人の市会議員を合んでいた。十二年度案にも土地を率先提供し、十八年度案について既に腹は決っていた久部の反対者は、ちやうど宮崎県に出張中の建設大臣に陳情することになり、前記の各氏は同行しなかつたが、久部の人達の婦来談によれば買収価格六万円が全国平均相場であるとのこと、さきに十二年度に実施した剣崎が反吉六千円、揚網が五千円、白水が四千人、池田三平さんは七反半の買収に反じ、十八年度案では五反歩が買収予定で、全部貸小作地で、二分の一は小作人に与えることが条件で、農地法に依つて久部の大司清助さんに三反をおたえた。前後の事を知つた清助さんは、感激性の強い男であり話し上手な男でこのことを久部で吹聴したので、久部の空気が俄然一変した。池田利明さんの父上堅田村長池田長作さんは上堅田屈指の資産家で、小作米百俵有余の収入のある温厚篤実の人であった。親類縁者を招待して毎年小作祭りを催すが恒例であった。池田利明さんも久部津留を貸小作して、左の、五反歩の二分の一を小作人に与え、家屋敷も移転せざるを得ない計画になっていた。

蛇溝部落の最も西にある通称左ぶカ水肥川清美さんの

延から、川に沿つて肥川大吉さん延まで十七戸が移転の計画に当てられ、異議なくこれに反じ、蛇溝、川原線の両側に新築移転し、第四班を組織した。

昭和二十九年三月二十八日、佐伯大橋が竣工した。三、四時揃つていた私一家が、渡り初めの光景に浴した。その後左岸の東にはゴルフ場が整備され、上野の堤防も川床も採草地となり、川床はスポート公園になり、コシクリート振りの運動場は、テニスやロースケートの練習場に使われ、五月五日の子供の日を中心し運動會が催され、秋涼花火大会、盆踊大会、消防点検などの會場に使われ、使われている。大橋の西方の堤防は川床共に採草地に使用され、関係部落の人が管理して水害を守るため、共同一致堤防の愛護に努めている。

対岸の久部堤防も川床一帯が採草地に使われ、下流の堤防も同様蛇溝部落の採草地として愛護されている。

そして、昭和三十二年八月に長瀬橋が完成、長瀬部落の人は勿論、上久部近南部落、堅田方面より城南中津に通学する生徒の利用に貢献する延が甚大である。橋の袂には子供供連のため若草公園が設けられ、入場者も多い。豊南高校の運動場の端には、昔々番匠川の面影がわずかに残っている。南側の堤防は堅固に量上げされて、藤原土井の内と続いて採草地になつて、もう水害の心配のない部落を右手に見ることが出来る。

昭和三十八年八月に稲垣橋が完成し、四十年三月には櫻野橋も竣工。対岸の長瀬、龍護寺の耕地も、丈夫な堤防によつて水



害を防ぎ、稻垣橋を経て樫野橋に達する堤防は、各地の管理もよく安全である。

昔、灘の上荷船が通っていた上岡の木炭問屋宮崎佐市さんの裏川には、高島の井堰が設けられ、下流は禁漁区に指定されている。又高島には興人への興国人頼バルプ工場への水源地があり、樫野橋の上流には堤内川が合流して番五川に達している。

先覚者池田三平さんは、水害のない所づくりに貢献した故を以て、市制施行三十周年の記念式典に参列の光栄に浴したことを、終生忘れることはできぬと感激している。

市会議員池田静男さんは、郷愁はにわかにはかたがたいが、又部津留や女島津留に耕地を持つ地所として、牛馬の輸送に舟便をかりずすゑ、至極便利になつたと述懐している。

又長前田又一郎さんは、家や宅地を河岸の敷地に提供して、現在の土地に移転したのだが、母手水害を受けていた昔に比べて、心配のない安定した農業経営が出来ること喜んでゐる。

河川改修十二年度案によつて八反四畝の水田を、十八年度案で一反四畝の提出をした前田新作さんは、年間一人の労務者を雇つて、手広く稲作主体の農業経営を続けたいが、祖先伝来の水田一畝歩ほどを失つたことに愚痴もこぼさず、水田に五反歩ばかり水田を購入し、耕耘機を導入して植付、刈取りの労力を省き、水害のおそれのない場所には牛舎を設け、年間二十頭から二十五頭の肥育牛をはじめ、採草地の草を利用して濃厚飼料を採之、冬は青草のない時期にそなえて燕麦を播き、春は草の多い時には紫雲英の乾燥貯蔵にとり、飼料を増産貯蔵に

専念大いに工夫研究している。飼育日数一年から一年四か月の期間中は、肥育牛を市場に出荷して巨額の収入をあげている。子供は大学を卒業、孫は農業高校を卒業させ、畜産主体の農業経営にあたり、又部落の同志と相俟かり、畜産技術の向上に研究会を開くなど、この道の先駆者となつてゐる。即ち昨年十月大分県肥育牛品評会に於いて、牝牛六ニニト三四八〇〇田で優等賞。又一昨年去勢牛五四九、二八九〇〇田で一等賞。年六回調催の家畜市場にいつも三頭内外を出荷して、趣味と実益兩つながらを兼ねた文化生活を楽しんでいる。

旧番五川(船頭所川)は、昔は鶴谷城の堀の役目とみられていた。この堀も埋められて、かつて船頭所の船着場も埋められ、延長一三二、五米の池船橋も二八米程に短縮され、池船橋と城南橋の中間に新しく橋の工事が進行し、船頭所側に日商店街が計画され、埋立地の分譲も希望する者が多いという。

明治、大正、昭和と世の中は度つたが、番五川の左岸すまゝも変化がおびただしい。河川改修による番五川は流路が南に移つたことになり、兩岸の堤防は堅固に完成し、うんと広くなつた川幅、そして長く高く架つた鉄つかの永久橋が次々に出来、今も且ての洪水による惨禍は全く忘れ去られようとしている。(おわり)

～32ページ下段よりつづき～

生徒にも上京して、独歩編集の近画報、戦時画報社に入り、独歩と共に働きました。文才に秀でて、紫水と号してまいりました。